

おほろのしみつ
朧清水は寂光院のほとりにあり。むかしより名高きしみづにして、和歌に詠ずる事数多し。つねに湛々として、

月の影は清水にやどりて澄、しみづは又月の皎なるをうつして清く。良暹法師りやうせんはかしも此地に幽棲して月も浮まん大原おほはらやと吟じ、寂然法師じやくねんは月をぞやどす大原の里とながめし。むかしも今さらに水の面にうかみ出るやうになん侍りける。

後拾 水草るし朧の清水底澄てこゝろに月の影はうかぶや 素意法師

後鳥羽院ごとうぼのゐんかくれ給ひて大原におさめ奉るよしきこえければ

続古 入る月の朧の清水いかにして遂に澄べき影をとむらん 順徳院

続後拾 八重葎しげれる下にむすぶてふ朧の清水夏もしられず 匡房

新千載 わが恋は朧の清水岩越てせきやるかたもなきこゝろ哉 俊頼

夫木 まれにこし朧の里に住なれて老は清水ぞあるじなりけり 丹後